

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
”黄金の郷“いわて平泉を支える、魅力溢れる”こしえるびと“のメッセージをシリーズで紹介していく。

農家と消費者、 JAが共に支える農業

千厩町奥玉
藤野 寿美^{すみ}さん

新たな挑戦

まばゆい日差しが照りつける広大な小菊畑。お盆の出荷に合わせて定植した小菊の苗が一面に広がる。2・5ヘクタールの転作田を活用し、藤野寿美さんは小菊栽培を営んでいる。

酪農から転換し始めた小菊の栽培は一からのスタートだった。40代半ば「人生まだまだこれから」と自分を奮い立たせ、無我夢中だった。改めて経営について学んだのもこの頃。JAいわてグループや県、岩手大学でつくるいわてアグリフロンティアスクールを受講し、「現状を維持するだけで



は先細りになる。5年先、10年先を見据え、目標を高く設定して取り組む」ことを教わった。

人との出会いとつながり

寿美さんの向上心やチャレンジ精神は一緒に働く仲間にも伝わり、作業の改善点や経営について、提案されることもある。共に高め合える仲間がいることを心強く感じている。

今までは先輩の背中を追いかけて、いろいろな



ことに挑戦しながら成長してきた。最近さまざまなか場で年下の若い農家と関わる機会が増え、自分が追いかけられる立場になったと実感している。「若い農家の話から新たな気付きや元気がもらえる。これからは、やる気のある若者を支え、共に成長していきたい」。

「私にはお金で買えない宝がある」と寿美さん。今まで出会った人たちのおかげで今の自分がある。人に支えられ助けられてきたことに感謝が尽きない。だからこそ、農業と農家の理解者を増やし、消費者にも農業を支えてもらうことがこの先必要だと強く感じている。そのため、情報発信や農業体験の受け入れにも力を注ぎ、異業種との連携も模索している。

これからの小菊栽培

J A花き部会小菊専門部の部長を務める寿美さんは、常に先を見つめている。需要期がお盆とお彼岸に限定される小菊は、いかにその時期にいいものをたくさん出荷できるかで売りが左右される。産地情報をいち早く市場に届けるなど、売れる販売戦略づくりを生産者とJAが共に考え汗をかく必要があるのではないかと。専門部の充実と生産者の栽培技術の向上、後進の育成に力を入れながら、産地一丸となった取り組みを進めていきたいと決意を新たにしている。

——先輩方が培ってきた栽培技術や地盤を若い世代につなげたい。自分がそうしてもらったように。

PROFILE

藤野 寿美さん (58)

Sumi Fujino

千厩町奥玉

1959年千厩町奥玉生まれ。千厩高校、酪農学園大学短期大学部を卒業後、家業の酪農経営に携わる。2005年に酪農から小菊栽培に転換。現在、小菊250aを作付け、JA花き部会小菊専門部長を務める。両親、長女夫婦、孫2人(3歳、6カ月)と7人暮らし。

私の一品



手帳

探し求めてやっと出会えた手帳。1日1ページになっており、予定やその日あったことなどを書き込み、スケジュール管理や振り返りができる。手帳に書くことで、さまざまなことを整理するのに役立っている。